

女子マネージャー像の移り変わり

－新しい女子マネージャー像の考察－

高橋 菜々美

本研究を行ったきっかけは、自身が野球を習っていた際に知人から言われた「女の子なのに野球やってるの?」という言葉である。「好きなことを、女の子だからという理由で否定されるのはなぜだろう」と小学4年生ながらに感じたのを今でも覚えている。この経験から、野球とジェンダーを大きなテーマとして研究を進めた。

スポーツや野球における男女の違いは様々なところで見られるが、その中でもジェンダー的視点から見たときに男女で大きな差があるのはマネージャーだと感じた。

本論文では、どのような経緯で女子マネージャーが確立していったのかや、男女でのマネージャー業にはどのような違いがあるのか、そして本来の意味でのマネージャーとは何なのか、どのようなマネージャー像が求められるのかについて、様々な文献を参考にし、色々な視点から述べた。

これまでは、男女性別役割分担の意識が根強く残っていたこともあり、女子マネージャーは主婦的な役割を担うことが多かった。また、メディアでも「男子部員を支える女子マネージャー」というようにまとめられることがほとんどであり、その表現を自然に受け入れてしまう風潮があるのが現実である。

積極的に自らチームを引っ張り、チームや監督までもをマネジメントするようなマネージャーこそが、本来あるべきマネージャーであり、このようなマネージャーこそが、以前よりも男女平等が意識されるようになってきた現代社会で求められるマネージャー像なのではないだろうか。「女子マネージャー」と「男子マネージャー」に区別せず、「マネージャー」というくくりで、チームの一員として認識することが、男女平等に野球を楽しむことに繋がるのだと結論づけた。

最後に、野球やマネージャーにかかわらず、「男だから」「女だから」という理由で否定されることが多くあるように感じる。これは古くから根付いている「男らしさ」「女らしさ」といった固定的な認識によって起こってしまうのだ。この考え方を少しずつ変え、男女の境界線を縮めることが、性別に囚われずに「自分らしく」堂々と生きていくことに繋がっていくのだと感じる。